字間

余白が紡ぐ軒下の物語

榎本陽菜　白石たま綱　田上海颯

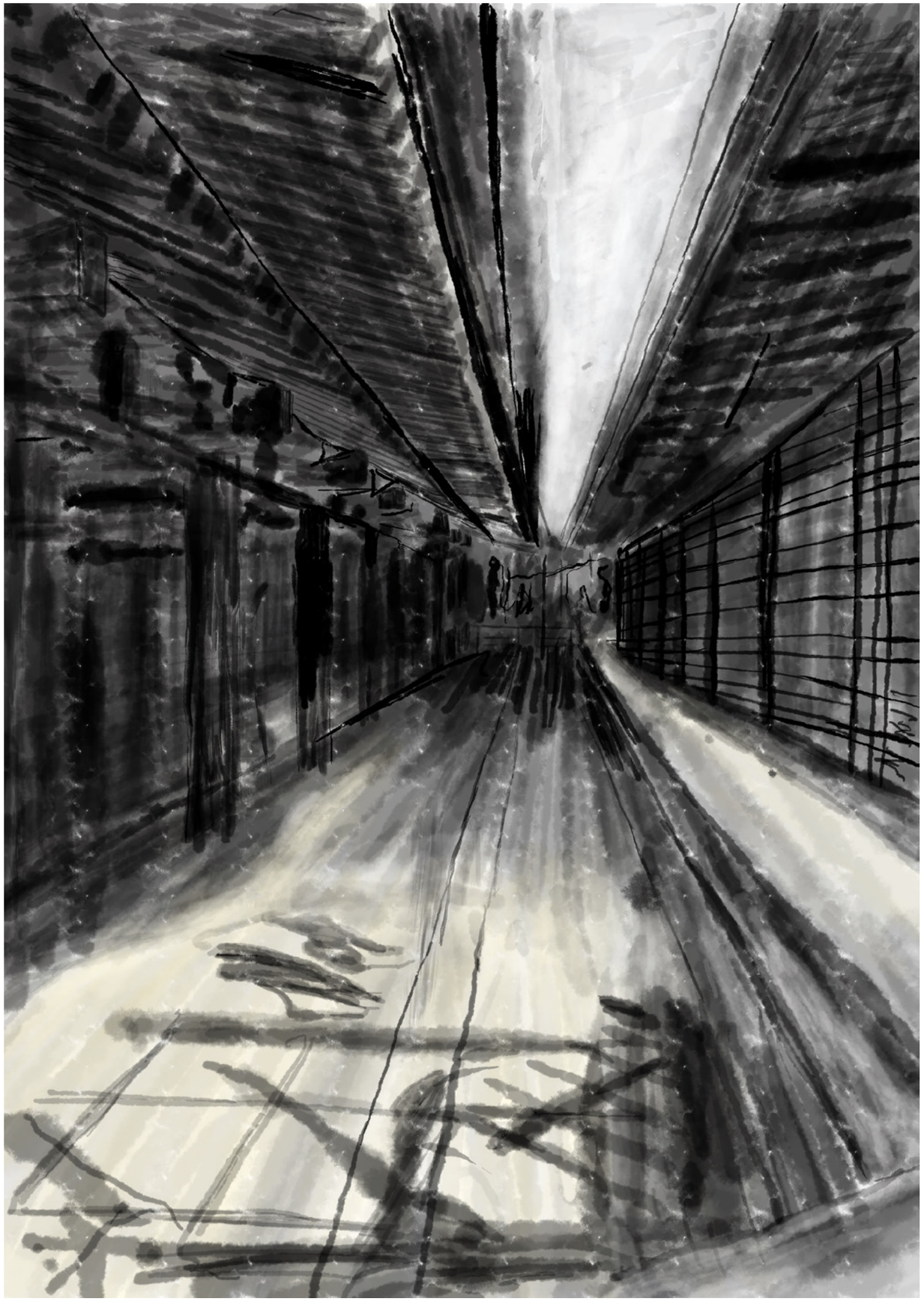
コンセプト

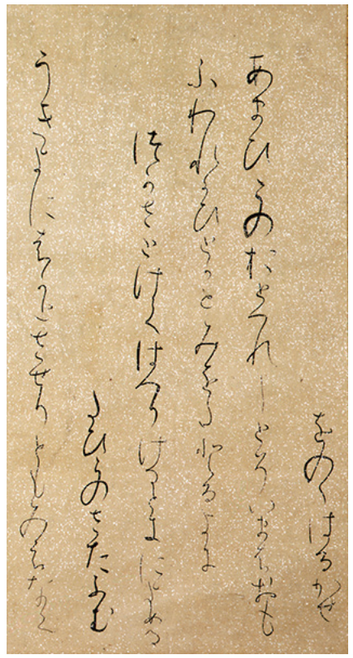
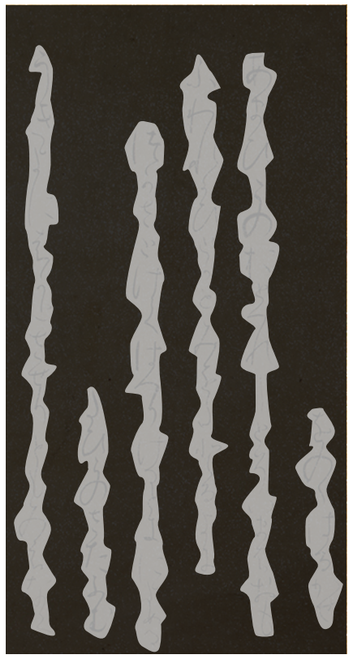
高野切れが持つ「字間（じかん）の美しさ」と、日本建築の「狭い軒下空間」には、共通する繊細なバランスがある。字間が適度に離れることで呼吸感が生まれ、狭い軒下には緊張感と奥行きが共存する。この二つの要素を空間デザインに取り込むことで、圧迫感と解放感が同時に存在する独自の空間が生まれ、人々が自然と立ち止まり、内省する場となる。

この提案では、高野切れの「間」を建築的な「余白」として解釈し、狭さを感じさせない軒下空間を創出する。陰影が時間ごとに変化し、訪れるたびに異なる表情を見せる場が、心を研ぎ澄ませる静謐な場所となる。

二つの軒が寄り添い、狭間に生まれる細い道。人はその通路をすり抜けるように歩きながら、ふと足を止める。差し込む光が揺れ、頬を撫でる風が一瞬の涼しさを運んでくる。軒の重なりが作る陰影が、まるで呼吸するように表情を変え、静かな物語を紡いでいる。

その空間には、不思議な魅力がある。圧迫感がありながらも、どこか心地よさが漂い、自然と内省へと誘われる。



余白と字間

文字と文字の間（字間）には余白が存在する。